女子野球で新天地へ

開志学園高（新潟市）に進学

リトルシニア能代前主将「将来はプロを目指す」

硬式野球のリトルシニア能代で唯一の女子選手で主将としても活躍した能代南中3年の金野蓮選手が、女子硬式野球部のある新潟市の開志学園高に進学することが決まった。4月から地元を離れて野球に打ち込むが、持ち前の明るさと負けん気の強さで、能代山本初の女子プロ野球選手を目指し新天地で活躍を誓う。

金野　蓮選手（能代南中3年）

浅内小ではソフトボールスポ少に所属。能代南中にはソフトボール部がなく、軟式野球部は女子部員を募集していなかったことから、リトルシニア能代で野球に打ち込んできた。一塁や二塁など内野手として活躍し、男子の力強い打球も素早い反応で処理、積極的な声掛けも持ち味で主将としてチームをまとめた。

県内、東北の高校には女子硬式野球部がなく進路に悩んだが、「高校でも野球を続けたい。秋田から一番近くて気候も似ている」と同校への進学を決意。夏の体験入学で部活を見学し、「専用の練習グラウンドがすごく広かった。みんな明るくて、女子だけのチームは楽しそう」と憧れを抱いた。

能代山本から初めて高校女子硬式野球で活躍を目指す金野

全国高校女子硬式野球連盟によると、現在21校が加盟し、毎年春と夏に全国大会が開催されている。同校は25年に東北・北陸地方で初の高校女子硬式野球部が創部され、今春入部する金野は4期生になる。部員は現在1、2年生30人余で、今春も15人前後が入部する予定。「友達や家族と離れる不安はあるが、みんなが応援してくれるので楽しみの方が大きい」と目を輝かせる。

リトルシニア入団当初はソフトボールとの違いに戸惑った。学年が進むにつれて男女の力の差も痛感した。2年生の春には男子と同じメニューについていくのがやっとで、「打球が遠くに飛ばせなかったり、ランニングで1人だけ遅れたり、何をしても駄目だった。つらくてやめようと思った」と振り返る。

支えになったのはチームメートと家族の存在だ。毎日のように自主練習に付き合ってくれた父洋さん(42)や相談に乗ってくれて励ましてくれた母千晶さん(42)、練習を休んだ日に「大丈夫?」とメールで気遣ってくれた仲間たち。「みんなのおかげで大好きな野球を続けてこれた。男子の中でプレーするしかない環境だったが、『女子だから』を理由に野球をやめたくなかった。男子の中でも一番になるという気持ちで頑張ってきた」と話す。

リトルシニアの大沢勉監督(67)は「高校は全国から選手が集まって来るが、金野のことは心配していない。明るくて前向きで、元気で負けず嫌い。競争心を持って、高校でも活躍してくれるでしょう」と太鼓判を押す。

高校ではチームメートと切磋琢磨することを誓うとともに、その先には女子プロ野球選手になる夢がある。20年に発足した女子プロ野球リーグは現在、4チームが活動。「サッカーの『なでしこ』のように、女子野球をもっと有名にしていけるように頑張りたい」と張り切っている。